

「晩秋の高尾山自然観察行(8)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

この時期、植物の種子や若干の菌類は見つけることができるが、昆虫の姿はなかなか見当たらない。それでも全くいないわけではなく、その気になれば「必ず」見つかる。大切なことは「本気で見つけようと思って、注意しながら歩くこと」である。



たとえば、これはアブラムシの一種。ちょっと自信がないが、恐らく「トドノネオオワタムシ」という種類だろう。アブラムシに翅があるのも妙だが、もっと不思議なのは、体に綿のようなものをまとっていることだ。「雪虫」と呼ばれることが多い。



アブラムシ科の昆虫は、通常翅を持たないが、生殖飛行など特別な時期には、翅を持つ種類がある。トドノネオオワタムシにも翅を持つ個体が見られる。しかし、飛ぶ能力が非常に低いので、補助的に綿のような

ものを身にまとって、揚力をアップさせているらしい。この綿のようなものは、虫自身から分泌されたロウのような物質である。「雪虫」の名の由来は、「小雪が舞っているように見えるから」とか「雪虫が舞うと初雪が近いから」と言われている。実際に群馬県西部では、雪虫が飛ぶと、数日後に初雪が来ることが多い。



これは「樹木の種子」か「チョコボール」のように見えるが、「虫こぶ」の一種だという。中に虫がいるかどうかを確かめて、もしいたら死んでしまう可能性があるため、そのままにしておいた。



私が一番驚いたのが、この蛾の成虫である。その名も「フユシャク(冬尺)」というそうだ。「冬に見られるシャクガ(尺取虫の成虫)」という意味だ。12月のこんな時期に成虫でいる蛾にも驚いたが、メスは翅が退化して飛べないと聞いて、もっと驚いた。写真はオスで、人工的な柵の雨の当たらないような場所に「静止姿勢」でじっとしていた。メスも探したが、残念ながら見つからなかった。蛾類の同定は非常に難しいが、図鑑を見ると「ナミスジフユナミシャク」(波筋冬波尺) *Operophtera brunnea* という種類のような。活動期は11月~1月だという。冬でも観察できるシャクガの成虫が見られると知って、もっと探したいと思った。